



石炭山錢路見込雜報
四氏

2453



114
A 2834



千八百七十三年十二月十六日日本東京
呈

北海道開拓使教師頭取並顧問

セ子ラル、ホーレシケフコニ貴下

札幌ヨリ石狩河畔「バラト」河口又ハ其近傍ノ場所迄良
巧ナル丁字形鑛ノ輸車路ヲ開クニ「マイル」ニ付凡ソ
價何程相裁可申哉旨御問合ニ付左ニ申上候
素ヨリ如此キ車路ノ價ハ其開クヘキ道筋ヲ實際ニ別
量不致候故允ソ積ニ候得共其地方ノ摸採ハ、知罷在
候間其金高可也精密ニ申上候事出来申候
入用ナル小搦漆及ヒ「ダイ」ニ用ル材ノ如キハ其開ク
ヘキ道筋ニ於テ得ラレ可申又車道ヲ築實スル砂石ノ

大正十一年四月
隈侯爵郵寄贈

如キモ許多有之其上地勢平坦ニ候間道路ノ勾配ヲ作
ル事甚タ容易ニ候故ニ其失費ハ鐵ノ價ヲ除クノ外如
此キ道路ニ於テハ少許ニ可有之候
右之如クニ御坐候間其費凡ソ左ノ如クニ可ク之哉ト
被存候

鐵條ハヤルハニ廿五磅トシテ一マイルニガ
ハ十七噸一噸ニ廿九十弗

運賃迄込テ七千八百三十弗

十ニール鐵條ヲ固
持スル金スパイタ釘

八百弗

輸入之上ノ八千六百三十弗

タイスノ四百九十五弗

道筋ノ地面テ採レ勾配ヲツケ水排ヲ造リ砂土ヲ以テ
道ヲ築實シ陰溝ヲ造ル等ノ費ハ節儉セハ一マイルニ

付壹千五百弗ニ過キ申間敷然レハ鐵道ヲ引ク費ヲ一
マイルニ付五百弗トシテ總高一マイルニ付壹万二千
弗内ニ可有之左スレハ全額壹万叁千三百三十弗ニ有之
候道程ハ長クモ七マイルニ過キ不申候間全道八萬五
千弗ニテ出來可申如此キ道路ハ貿易盛ナルニ至テハ
何時ニテモ汽車ニ用ルヲ得申候只汽車ヲ購フノ費而
已ニ候
右ハ素ヨリ九ツ積リニテ道ヲ造ル仕方等ニテ大ニ異
リ候得共來春ノ策ヲ建ルニ於テ御手引トモ可相成哉
ト奉存候拜具謹言

開拓使測量長

ゼームス、アルワスソニ

矯龍氏報文中抜萃

千八百七十三年九月三日

近頃ライマン氏カ測量セル石狩河畔ノ石炭ハ其高實
 ニ無量ニシテ之ヲ開採スル時ハ其實効大ナル知ハル
 同氏既ニ開採ニ便ナル層脈六箇ヲ看出セリ其厚サ三
 尺乃至六尺ニシテ其位置景モ開採ニ便ニ水ヲ出スニ
 人エヲ藉ルニ及ハス同氏其量ヲ測テ良好ノモノニ億
 五千万噸ナルヘシト云

此石炭ヲ互市場ニ運輸スルニ二道アリ一ハ石炭坑ヨ
 リ石狩川迄九ソ十四マイルノ間鐵路ヲ造リ夫ヨリ河
 ヲ下レ、ストロゴノフ灣ヲ横切リ小樽港ニ出スニアリ
 其全距離九ソ七十、マイルトス又一ハ室蘭港迄直ニ鐵
 道ヲ通スルニアリ其距離九ソ八十五乃至九十、マイル

トス

此礦田ハ札幌ヨリ室蘭港迄ノ鐵道ニ接続ス、キノ地勢ナリ

此兩道ノ内景初ノ道ヲ採ル時ハ水陸運送ノタメ其都度入費嵩ミ且ツ量目減少シ大ニ相場ニ關係ス且ツ小樽ノ卷タル半歳ノ外航海スル能ハス是モ亦念及ルヘカラス

エニテルモ港新室蘭ハ島中景良ノ港ニシテ終年船ヲ通スベシ此道ニ依レハ礦坑ヨリ別ニ石炭ヲ動スコトナク直ニ鐵路ヨリ送一噸ニ廿九ソニ弗ノ價ヲ以テ大船ノ荷倉ニ積ム事ヲ得ヘシ
聯邦ノ礦坑ハ海濱ヲ離ル二百乃至三百マイルノ處ニ多シ而テ皆鐵路ヲ以テ接續ス

此無量ノ煤田タル有價須用ノ材木繁茂セル膏野ノ中央ニアレハ材木ヲ安寧ニ運送セハ是亦利多カルヘノ且ツ鐵路ヲ以テ水府ヲ室蘭ト相通スル事緊要ナレハ茲ニ鐵路ヲ開ク景モ使タル疑ナレ而テ之ヲ開ク即今ニアラナルモ數年ヲ待タサルベシ
相當ノ權利ヲ與ヘ十分ノ保護ヲ為サハ必ス資銀ヲ出シテ此鐵路ヲ開ク者アルヘシ
黄金其他礦物ノ如キハ現今ライマン氏檢査中トハ即今其委細ヲ報スルヲ得ス云々

千八百七十四年五月十六日ライマン氏ヨリケフロニ氏ヘノ報文抜萃

幌武井煤田ノ煤炭ハ容藏着手ノ地ニ近キ大河トシテ
ノ堤岸ヨリ横道ヲ穿テ之ヲ得ル志ヲ好手段ナルハ
レ○录モ上方ニアル開採スベキノ炭床ハトシテ
印ノ抗ヨリ東方ノ横道ヨリ着手スルヲ良トス又其五
ノ西傍ハ低クシテ此炭床ニハ唯其分量些少ヲ含メリ
○然レ氏此抗ノ南西半里ニアル分流ノ西部ヨリ開採
スル恐ノ良ナルマシ然レナカラ爰ニ於テハ其炭床
露出セス○其他開鑿スハキ炭床ハ此水流ノ兩岸ヨリ
シテ煤炭ノ常形馬鞍形ノ西側ヨリ開鑿スルヲ利アリ
トス○然レナカラ其傾斜鋭カラナルモノハ馬鞍形北
西ノ側ニアリ故ニ露出如場所ハ開採ニ最モ便宜ト
ス此水流ホロハイ河邊ニ於ルモ亦斯ノ如シ云々

千八百七十四年七月廿三日

矯龍氏報文拔萃

余屢々閣下ニ書ヲ呈シ書簡輻湊スルカ如シトイハ
其書タル緊要事件ノ説明アリ閣下コ、ニ注意アラハ
全報ヲ呈スル前此等ノ事ニ就テ賢慮ヲ回ナラル、ノ
時間アルベシ

来曼氏書簡拔萃

昨日ハ我等煤炭ヲ探ルヘキ須要ノ支流ヲ見ス但シ地
質學上ニ於テ益アル岩層ヲ見ル為メ時々歩ヲ止メタ
リ我等今連山ノ間ニアルヲ以テ今日ニ至ル迄岩層ノ
露出セルヲ見ル既ニ許多ナリ依テ思フニ容藏我カ報
文中ニ登志列擇太的幌向擇太的ト名シタル二岩層ハ
一物同体ナレバシ蓋シ此岩層地質的ニ於テ一種ノ異

状ナル事アリ若シ此岩層石ニイフカ如クナラニハ
 客歳向煤層ノ下ニアツトセル岩石ハ尙新シキ物ニ
 シテ恐ラク所トシテ煤層ノ上ニアラニ昨日見タル物
 ハ唯此等ノ岩層ノミナリシニ夕方當地ニ達スルニ及
 テ大ニ異リタル尙古代ノ岩層ヲ看出セリソハ未ダ詳
 細ニ検査ヲ遂セズ然レ其間ニ薄少ノ石灰石アリ余石
 狩ノ上流及ヒ其左右ノ支流トモ石灰石アリヤ否ヲ不
 絶探索シタレテ終ニ見ス唯空知ニ煤炭ニ近ク小石灰
 石アリ其塊重キコト錢鑛ニ相應セリ然モ其量少フシ
 テ堀ルニ足ラス但シ四インチノ脈一箇良好ナル炭層
 ノ下ニ接セルアリコハ掘出スニ容易ナリ實ニ方今テ
 以テ見ルニ后来北地製作ニ就テ錢鑛ヲ缺クカ如シ然
 モ此大島ニシテ錢鑛ノ産出ナシトイフハ未ダ信スル

能ハ煤炭ニ至テハ之ヲ計算スルノ道ヲ知ラサル者
 トイハレ其噸數ノ多キ驚クニ甚タリ試ニ煤田ノ境界
 ヲ昨夏中測量セルホコナイノ地ヨリ空地ニ方迄トシ
 其長ナニ約ニイリ即八里トスル時ハ此内開採スヘキ
 脈ノ厚ヲ平算三十尺即十ヤルト而テ水準上煤層ノ
 高ヲ平均一百五尺ニシテ傾斜(四十五度)五十尺
 ス然レハ水準上ニ一ヤルト毎ニ五百立方ヤルト即チ
 噸アリ一マイル毎ニ八十八萬噸二十マイルニ一
 百六十萬噸アリ而テホコナイニ及空知トモ二ノ鞍狀
 岩層アル時ハ其左右ニ煤炭アリ然レハ水準上凡ソ七
 千萬噸ノ石炭アルベシ蓋シコレハ田ノ一端ナリ他ノ
 一端亦廣シ然レハ全周圍ニ就テ水準上石炭ノ高前數
 ニ三四倍スベシ但シ煤田ノ中部ハ算セナルナリ且ツ

石云フハ水準上ノ石炭ノミ水準下ニ出テハ深サ一
百尺毎ニ尚許多アリ四尺ノ深ナリ至ルトスレハ之
ヲ開採ニ堪ルノ極トシテ前敷ノ四十倍ニ至ラハ此計
算ニ依ルニ既ニ數億萬噸ノ高ヲ得ルト雖モ是一小煤
田ノ九リ積リノミ諸河ニ頭ル、所ノ炭煤ヲ以テ推念
スルニ留南近傍西岸ニモ亦煤田アリ但シ北ノ方ニ建
ル者ヨリ大トラサセム可ナリ大ナルカ如シ若シ本使
ニ於テカヲ極メ石狩川ノ東岸ヨリ空知迄鐵道ヲ開キ
又支道ヲ以テ山間ニ通ルカ或ハ鐵路ヲ以テ他ノ場所
ト通シレハ煤炭開採ニ從事スルモ石炭ノ盡ルノ憂既
ニナレ曠向(ホコナイ)ノ炭脈タル空知ノ脈ト相連續ス
ル殆ト實ナリ兩所岩石ノ結構密似セラルヲ以テ見ルベシ
但シ空知煤層ノ厚サハ闊セサルナリ而テ其近キ直線ニシ

テ十五マイル(六里)ナルベシ○礦山ノ業盛大ニ至ルハ
石炭ヲ求ルノ度ニ依ル若シ良好ノ煤礦ヲ看出スルニ
於テハ製鍊ノ石炭ヲ賣ス亦無數ナルヘシ
我カ本日迄ノ行タル其入費ノ償フニ足ルト云フヘシ
而シテ此后モ亦然ルヲ期ス
余未受氏ノ報ヲ多ク前ニ載ル所以ノモノハ彼地石炭
如何ノ論之レニシテ決スヘケレハナリ
却説茲ニ議スルキノ一事ハ此巨大ナル煤田ニ着手ス
ル場所及ヒ形積ノ便路如何ヲ定メ此無量ノ石炭ヲ世
界ニ賣クノタメニ開クニアルノミ
今ニ於テ此石炭掘ケ方ノ多寡ハ決スル能ハストイヘ
氏此物タル衆人ノ望ニ一ツナリ且ツ此煤炭タル質良好
ニシテ量素ヨリ無盡加ルニ海濱ニ近シ若シ其開採ノ

開採便

開採

法良、其之レノ扱フ巧ナランニハ東洋石炭買賣ノ權ヲ掌握シ能ク莫大ノ出銀ヲ償フニ在ラム]必セリ此嶺山開採ノ業タル政府ニ於テ為ヌヤ或ハ庶人ヲシテ之ヲ為ナシムルヤハ素ヨリ閣下ノ賢斷ニアリ但レ余ハ庶人ヲ良トス但レ其孰レニ於ルモ之ヲ市頭ニ出スノ策ニ就テセニノ愚案ヲ建言スルニ於テ害ナカルベシ

今茲ニ二道アリ一ハ石狩河ヨリ日本海ニ出スニアリ一ハ太平洋ノエンドルモ湾即チ室蘭ニ出スニアリ此兩道孰レヲ撰ムハキヤノ儀ニ就テ起ルハキ論ハ其之ヲ出スヘキ道路或ハ運河ヲ造ル當初着手ノ出銀高ニアルノミ之ヲ置テハ室蘭ニ依ルノ便利タル毫モ疑ヒアリ

室蘭ヨリ幌向ノ大煉田ニ達ルニハ九ソ八十乃至九十マイルノ錢路ヲ要ス而テ室蘭港ヨリ札幌迄ノ新道ヲ用レハ其内九ソ六十マイルハ地面既ニ平滑ニシテ一二ノ改正及チ橋梁建築ニ依テ錢路ヲ造ルニ適セム而テ道ヲコ、ニ取ルキハ石炭山ヨリ直ニ船艙ニ石炭ヲ容ルベシ且ツ其港タル安全ニシテ四時航通スヘク加之東京并ニ横濱ニ迄キ丁之ヲ石狩河畔起案ノ錢道駐車場ヨリ船積スルニ較スレハ九ソ二百五十マイルトス左ニ石狩河ニ依ルノ利害得失ヲ畧記スヘシ

石狩河ニヨレハ其河畔船積場迄造ルヘキ錢道ノ長ク室蘭ヨリ短ニシテ二十五マイルニ過キス是利ナリ而シテ不利亦少ナカラス左ニ陳述ス

一 石狩河、殆ト半年間堅氷ノタメニ閉ラル

二 河ニ湖ノ駐車場ニ於テ石炭ヲ積入ルニ屢々積
 積ヲ為ナシタルメ此河ニ相應スヘキ船々ヲ特別ニ造
 ラナシテ得ス而テ河口ノ沙灘上ハ十二尺ノ深サナレ
 ハ水入九尺ニ過ナル五百乃至七百噸積ノ外車船ナカ
 ルベカラス
 三 船舶絶ヘス沙灘ヲ越ヘ河ニ入ルヲ得ス不安ノ沖
 ニ碇泊シテ好天ノ埃ナルベカラス
 四 暗車船ハ其噸數ニ比スルニ水入多シ且ツ浮木ノ
 為メニ螺旋ヲ破損スルコトアリ
 五 煉田 茅モ込キ場所ヨリ船ニ積込ムモ東京其他
 ノ市頭ニ出スニ當テ室蘭ヨリ遠キコト九二百五十マイ
 ルナリ
 六 石狩河ニ月ル船ニハ其積高モ限リアリ而テ此船

ヲ以テ遠洋航海スル安穩ナラス又利潤ナシ
 曾テ荷船ヲ以テ石狩河ヲ下シ河口ニ於テ小船ニ積入
 レ或ハ曳テ小樽港ニ至リ茲ニ船積レ或ハ陸ニ貯ルノ
 弊ハアリトモコハ今更論辨スルニ足ラス其故ハ如此
 ヲ屢々積積ヲ為ス時ハ其賃銀ト石炭ノ減少トニ依テ
 市頭ニ到ルノ頃ハ其相場ヨリモ遙カニ高キニ至レハ
 ナリ
 前文載ル所ヲ以テ大ニ為スノ事アル知ルヘキナリ水
 準上已ニ億萬噸ノ石炭アリ又其水準下ニ至テハ尚多
 シ之ヲ開採スルノ法其宜ヲ得其不取適宜ヲ得ハ東半
 球上石炭賣買ノ權ヲ得ニシ必セリ云々

八年八月廿八日米國人バツ子ヨルドル當出張所
へ相越し黒田長官殿對話ノ終末

通譯

山内岐雲

筆者 椿尚賢

彼

ホロムイ石炭山大概ノ取調書別紙相認タリ石狩ヨ
リ出スモ便ナレハ濠ノヨキ「エンドルモ」迄鐵道ヲ建
築スルノ便且ツ利アルニ如カズ
各國地割ノ法別紙繪圖ノ通り一エーケルツ、四角ニ
地所ヲ割リ會社ニテ鐵道ヲ設クルキハ其線路ノ左
右、各十マイル宛ノ地所ヲ付與ス但圖ノ如ク黑白
ニ別テ假令ハ黒ハ會社ニ與ヘ白ハ政府ニテ持テ共
間、鐵道ヲ設クレハ自然人民モアツマルナリ兩國

開
石
使

ナドモ景初ハ北海道同様不開ノ國ナリケレハ右ノ
法ヲ以テ開ケリ

石炭山銅山ハ一エーケルニ付十ドルノ價ヲ以テ人
民ニ賣與ス

煤田ヲ人民ニ賣與スルハ各其望ニマカセ好キ脈ニ
アタレハ其者利アリトス

我 黒印ノ分ハ人民ニ渡スモノトシ賣與スルカ

彼 鐵道會社ニ與ルナリ

我 右ハ石炭山アリテ車道ヲ築ク時ノ法ナラン石炭山
ナクシテ車道ヲ築クトキハ如何

彼

石炭山ナシト雖モ其仕方ハ同シ

我

白印ヲ人民ニ割渡ス時ハ無代カ

彼

ソレハタビナリ

我

若シ會社ニ附與スベキ黒印ノ場所ニ天嶮ノ要地ア
リテ防禦ノ固メトスベキトキハ如何

彼

御用地ノ印ヲツケ置會社ニハ其代地ヲ與フ

石炭山ヨリ室蘭迄ノ鐵道線ハ自予想像ノ線ナリイ
ヨ、鐵道ヲ築クトキハ政府ニテ見込ヲツケ御不極

開 石 使

アルヘシ

我

今日本ノカニ及フ処ヲハカリ手近ノ仕方可然ト既ニ弘明九ノ通スル処ヨリ馬豆ノ便ヲ考ヘ石炭山迄一所ニハ小屋ヲ建運輸ノ道ヲ開クツモリ

彼

ソレニテ八年々採出ノ高多ク至リカタシ

我

隨分多量ニ運搬致サルベシ

彼

シカレソレデハ手ヲ縛セラレテ仕事ヲ致ス如シ一時ハ石狩川運搬モヨカラシナレバ我ハ後来ノ利ヲ量リ北地ノ進歩ヲ期スルナリ

「エンドルモ」ハ鉄道線ヲ築テハ一ケ年ニ石炭十八萬噸

ヲ出スベシ之ヲ一噸ニ元トミテ三十六萬元ナリ

目今ノ考ニテハ鉄道ノ着手六ケ敷ヤウナレバ我レ

日本ノ勢ヲ見ルニ前ニ進ムカ後ニ退クカト云ハ追

々進歩ノ景氣ナリ夫故後来ノ利ヲハカリ書中ニ申

レ上タリ

鉄道建察ヲ人民ニ受買ハセル時ハ手輕ニ出来之ヲ

政府ニテスレハ安價ニアガラズ

我ハ支那人ヲ雇ヒ使役シ後ニハ移住セシメントス

ル心得ナリ

石炭運輸蒸氣船ニテハ割合ヨロシカラズ故ニ我ハ

帆船船出来ノツモリ

エンドルモ」ハ石炭園七場ヲ出来船便ヲ待テ各地ニ

輸出ス

政府テ事ヲ為ル時ハ役人ノ月給ニ追ハル、ナリ
我北地ニ往テ實地ヲ檢スル時ハ日本人ノミヲ召連
レモシ職ニ堪エザレハ直ニ取ノケ申スベシ
日本役人ハ元來メキ、ノ者ナキユヘ入ヲ取捨スル
能ハズ

我レハ鉄道ヨリ帆船ヲ入用四百萬ドルノツ
モリ

馬足ニテ搬ゲ時ハ終年一日ニ五十噸位ニスギザル

鉄道デキル上ハ土地ヲ人民ニ賣與シ石炭ヲ輸シ材
木ヲ出シ畑物ヲトル諸般ノ便利夥シ且ツ人民生産
ノ道ヲ得ベシ

土地區畫ノ方一マイルヲ一區トシ十マイル毎ニ一
區ヲ學校ノ付屬地トス

我着手スレハ二年ノ内鉄道風帆船トモ出来スベシ
兵士ヲ以テ道路ヲ築造ス丁モアリ假令ハ一日ノ内
四時間道路ヲ造ラセ餘時ハ操練セシム

官園ノワキ水利ノヨキアリ機械ヲ仕カケ婦女子ヲ
シテ織物ヲナシムルニヨロシ
ヨキコイニギニールアリ當秋該島ヲ測量セシメント
ナラハ一千ドル位ニテ雇ヒ得ベシ

右ニテ畢ル

ホロナイ山石炭開採ノ見込概畧

一 石狩川ノ上流ニテ石炭ニ富メル地甚多シ曰ポロナ
 イ曰イクレベツ曰ビハイ曰空知等是ナリ石炭ヶ所
 同ニテ石炭ノ質美ニメ運輸ニ便ナルハポロナイ
 ナルベシ但シ余ハ未ダビハイ及ビ空知ニ至ラズト
 雖此兩地ハ何レモポロナイヨリ上流ニアリテ川口
 コテ運漕ノ道遠ク陸路ノ開キ方ニモ多クエテ費又
 ア以テナリ

一 石炭ノ性質並ニ脈絡ノ厚薄等ハ既ニライマン氏ノ
 實地測量及ビモントル氏ノ分析試験アルヲ以テ又
 爰ニ贅セズ但運輸ノ方法ニ就キ聊余ノ賤見ヲ陳ス
 一 石炭運輸ノ法ハ己ニケブロン氏ライマン氏并豫本
 氏ノ論ゼル如ク實ニ兩造アルベシ其甲ハ石狩川造

ヨリ千載驛ヲ貫キ室蘭港ニ至ルマデ九四十里餘ノ
鐵道ヲ開キ石炭ヲ室蘭港ニ運來リ此ニ貯蓄シ内外
ノ船舶ニ賣却セントノ策ナリ其乙ハ石炭山ヨリ石
狩川畔マテ車道ヲ開キ此距離最近キ處石炭ヲ出シ
是ニ於テ川舟ニ積替ヘ蒸氣船ニ換リセ石狩村又ハ
小樽村ニ送ラムトノ策ナリ

一甲法室蘭ニ鐵道ヲ鋪ク見込ハ遠大ノ奇策ニシテ五
十歳或ハ百歳ノ後大功ヲ期スベシト雖方今ノ時勢
ヨリ之ヲ考フルトキハ頗ル迂遠ナルニ似タリ是レ
四ノ余里ノ鐵道製作ニハ諸器械ヲ合算シ二百八十
萬圓ヨリ三百萬圓ノ金額ヲ費シ而シテ方今室蘭ニ
於テ賣却スベキ石炭ノ高ハ甚大ナラズ其價本金ノ
利子ヲ償フニ足ラザルベシ但シ追々石炭ノ商法ノ

隆ニシ太平海ノ郵便船其他ノ洋船ニ約シテ之ヲ給
與スルニ至レハ頗ル大事業ヲ拳クベシト雖此ニ又
一故障アリ其故ハ室蘭ハ東海岸ノ一良港トイヘト
其傍ノ地物産多カラズ且其位置内灣ニアリテ大
洋ヲ航スル船ノ來泊ニ便ナラス故ニ十年ノ後トイ
ヘドモ洋船此港ニ入來ルコト必至館ノ如ク盛ナラザ
ルベシ然ハ石炭ノ賣却キ高モ亦至館ノ右ニ出ツル
コト能ハズ假令ハ石炭ノ坑業ヲ盛ニシ運輸ノ長道ヲ
設ケ多量ノ石炭ヲ室蘭ニ送致スルモ賣却ノ高必限
アリテ其大費ヲ償フコト最難シ是レ着手ノ初ニ方テ
最思慮スベキ一大事ナリ

一乙法即石狩川ヲ積下ス法ハ姑息ニ似タリト雖方今
ノ計算ニテハ頗ル甲法ニ優レリトス是レ一ニハ其

賣用サツ又一ニハ其成巧速ナルニ由ルナリ
 一故ニ即今ハ先ツ此ニ法ヲ施シ多クノ利益ヲ獲テ後
 次ニ甲法ニ及ハハ易キヲ先ニシ難キヲ後ニシ小ヨ
 リ大ニ及ブノ理ニ從ヒ數十年ノ後大業ノ開クノ基
 トナルベシ
 但シ余ガ石狩川ノ石炭坑ヲ開ク説ヲ主張スル所以
 ハ之ニ由テ敢テ開拓使ノタメニ大利ヲ興サム
 ルノ望ニアラス唯年々其所得ヲ以テ其所費ヲ償セ
 且本金ノ利子ヲ拂フニ至レハ則餘アリトス而メ採
 掘運漕賣却ノ法宜キヲ得ハ數歳ノ後利潤ヲ以テ本
 金年賦消却ノ便ヲ得ベシ夫レ此大坑ヲ開クトキハ
 幾百ノ坑夫幾百ノ職人此ニ齎集レ未リ採ヲ伐リ田
 ヲ耕シ無人ノ沃野忽十里落ニ化シ熊羆ノ跡自ラ人

馬ノ脚ニ變シ以テ開拓ノ事業ヲ輔クル鴻益アリ是
 レ余カ深ク企望スル所ナリ雖然石狩川ニ沿フテ石
 炭ヲ下ス法モ亦決シテ輕舉スベカラス能ク事ノ前
 後緩急ヲ謀リテ後エテ創ムベシ其順次愚見如左
 第一 石炭山ノ測量
 第二 陸運法
 第三 水運法
 第四 賣却法
 第一石炭山ノ測量
 一ボコナイ其他近傍ノ石炭山測量昨年本年教師ライ
 一ニ氏ノ所為地質學ノ上ニ於テハ頗ル尽セリト茲
 今方ニ之ヲ開採セムニハ更ニ精密ノ實驗ヲ行ヒ何
 レノ地位何ノ脈床ヨリエテ創ムベキ手段ヲ定メ施

術ノ順序ヲ計ラサレハ實際ニ臨ミ幾多ノ困難ヲ免
 ルベカラズ但シ其地位方向ヲ定ムルノ事テ碩學先
 生ノ指揮ニ依頼スルニ及バズ唯多年実地老練ノ人
 ニ訛シ之ニ従事スベシライマニ氏實經驗ノ人ナレ
 ハ是レ適當ノ主任ト謂フベシ若シ実地見聞ノ人ニ
 頼ラズ開山ノ法則ヲ遵行セザレハ無用ノ費弊ヲ招
 キ他日大業ノ妨ヲ為スル素ヨリ論ヲ疾ズ
 一石炭山ヲ開クニ強テ難事ニアラズト雖最初ヨリ気
 水ノ流通ヲ考定スルノ亦容易ナラズ其詳ハ石
 炭山報告書中故ニ十年又ハ二三十年ノ後ヲ謀リ預
 其方法ヲ算セザレハ後來如何ナル大不便ヲ生ス
 ヤモ亦知ルベカラズ是余ガ創業ノ時ニ方テ実地經
 験ノ人ニ委託スルヲ望ム所以ナリ

第二陸運法

一陸運ノ路ハホロナイ山ヨリ石狩川ノ西岸對雁村ニ
 至ルヲ以テ最便利トス此里程九十里ホロナイ川ヨリ
 六里十歳川ヨリ對雁村迄アリ石炭山ニ近キ地
 九里四里内ヲ十里ト算ス
 ハ稍山麓ニ接スト苗八九分ハ平原ノ深林又若澤ニ
 ノ鉄道ヲ布クニハ極メテ便宜ノ地形ナリテイ氏ヲ
 レテ之ヲ測量セシムルハ其險易高低ノ度ヲ見ルコ
 亦難事ニアラス
 一鐵道ノ造法ハ真ノ丁字鉄ヲ用フベシ岩内ノ如キ輸
 車道ハ是ハ前技ノ上ニ平キ鉄其製作容易ニメ其費
 用モ少シト雖長久ノ用ニ堪ヘズ多分ノ重荷ヲ運輸
 スルトキハ屢々破壊シ之ヲ修理スルノ費多キガユ
 一數年間ノ算ヲ立ルトキハ却テ大損失ヲ為スベシ

具ノ丁字鉄ヲ布クトキハ一時ノ費大ナリト雖之ヲ
永久ニ保ツヘシ

一石炭ノ運送ニ供スル鉄道ノ入費地察臺木并ニ橋梁
トモ之ヲ合算シ一里ニ付九四万五千圓又五萬圓ナ
ルベシ但シ臺木ノ材ハ近傍ニ業生シ之ヲ伐取ル
容易ナルヲ以テ恐クハ右ノ價ヨリモ廉直ナルベシ
ホロトイヘヨリ對雁村迄ノ距離九十里ト積リ此代凡
四十五萬圓トス

一對雁村近邊石狩川ニ臨メル地ニ蒸気車停止場并ニ
石炭置場舟積場ヲ建築スベシ石入費凡積四千圓

第三水運法

一水運ノ法ハ平底ノ川舟凡四五十石積凡七位ノ者ヲ
製作シ積ニ二艘ツ、並ヘ堅ニ四艘完繋合セ都合八

艘ヲ小形ノ川蒸気船外車ノ者ニ換カセ石狩村コテ

下ニ可然地ヲ見立テ圖藏ヲ設ケ一旦陸上ニ揚ケ次

ノ日又右ノ如ク數艘ノ小舟ヲ牽テ流ニ湘ルニ供ス

一石ノ川蒸気船ハ二隻備置キテ毎日相交代シテ上下

スレハ毎日五十噸余ノ石炭ヲ下ス丁亦容易ナリ平

底ノ川舟ヲ作ル價ハ甚廉ナレ且川蒸気船ノ代ハ一
艘ニテ凡二萬圓ナルヘシ

一此種ノ船ハ横須賀ニ於テ鉄具諸器械不殘製作ノ上
小舟又ハ石狩ヘ運送シ彼地ノ木材ヲ以テ組立テ其
用ニ供スベシ若シ直ニ之ヲ横須賀ニ於テ造リ上
アルトキハ船形小ナルガユヘ彼地ニ回スニ甚難シ
ナリ

一右ノ蒸気船ニテ平底舟數艘ヲ牽セ一日ハ石炭ヲ積

下ケテ陸揚ヲ為シ翌日ハ之ヲ挽上クレハ隔日ニ上
下シ而シテ蒸氣船二艘アリハ毎日交代シテ往來シ
休日ヲ除キ日々平均シテ五十噸ノ石炭ヲ運ビ一ケ
月ニハ少クモ一千二百噸ノ高ニ至ルヘシ

一川蒸氣船ニハ外車ヲ附スルヲ便トス若シテスクリユ
レラ設クルトキハ水底ノ流木ニ鈎スルノ患アルベ
シ

川蒸氣船一隻ニ廿二萬圓ト積リ二隻ニテ四萬
圓

但蒸氣ノ馬力ニ因テ頗ル高下アルベシ
平底川舟一隻ニ月百五十圓ト積リ十六隻ノ價
九二十四百圓

諸石狩川運送ニ付一大難事ハ小流ノ流木ナリ水流

深キ處ニテ流木水底ニ埋伏スレ者ハ大害ヲ為スニ
至ラズト雖近ク水面ニ浮ムモノハ悉ク之ヲ切流サ
スニハアルベカラス假令ハ一旦之ヲ除クモ洪水ア
ルトトキハ又上流ヨリ積年ノ大材漂來ニテ以テ其度
毎ニ多クノ費用ヲ免レズ

一石狩川口適宜ノ地位ヲ見立テ廣キ石炭圍場ヲ造管
シ少クモ一萬噸ヲ容ルニ適セシメ其地勢ハ石炭
ヲ直ニ來泊ノ大小舟船ニ積込ニ便トラシムヘシ
此圍場并ニ波戸場ノ造管入費概算シテ九五千圓ト
ルベシ

一又更ニ一難事ハ石狩川口ヲ浚ヘテ大小ノ舟船ヲ入
流セシムルニ便スルニ一途ナリ余カ所見ニテハ石狩
村ニテ船積シ小樽ハ勿論箱館アツケシ等迄モ直ニ

二運漕セムト欲スル也然ルトキハ大小ノ蒸気船ナ
 風帆船自在ニ河口ニ入ホラズンバアルベカクズ
 扱石狩河口方今ノ渡船場ヨリ上ハ十ノ深フメ大ナ
 ル西洋形ノ船ヲ容ル、ニ足ルトイヘドモ此地ヨリ
 十町余海面ニ出ルトキハ沙洲積堆シテ僅カニ一丈
 ニ尺内外ノ深サトナルコト即チ「デイ氏」ノ測量圖ニテ
 明ナリ之ヲ掘リ浚ヘガレハ船舶ヲ通スル能ハズ此
 業タトヘ一度之ヲ施ヌモ洪水怒濤ニ過フトキハ又
 之ヲ埋ルガユヘ常ニ此ノ一艘ノ蒸気浚ヘ舟ヲ備オ
 キ時々其害ヲ除クヲ要ス
 此川浚舟一艘ノ價諸器械全備シ十八馬力ノ者ニテ
 九貳萬五千圓乃至三萬圓ナルヘシ
 淀川筋ヲ浚ユルタメ大及中ヲ買入レシ舟二艘

アリ今之ヲ用セズト聞ケリ其ノヲ讓受ケレナラ
 ハ後價ニテ之ヲ得ベシ
 一石狩村圍場ノ石炭ハ直チニ此ニ入津スル舟船ニ賣
 捌クコト勿論ナレド此法ノミニテハ賣却ノ高猶甚々
 シ故ニ之ヲ小樽運館其餘ノ港ニ運輸セスンハア
 ルベカラズ之カ為メニ所要ノ船員左ノ如シ
 一蒸気船一艘五六百噸積ノモノ
 石價 五萬圓
 一風帆船二艘二百五十噸乃至三百噸積ノモノ
 右價一艘ニ付壹萬圓ニ艘ニテ二萬圓
 石三艘ノ代價九七萬圓
 一運館其外ニ於テ石炭ノ出ルニ便宜ノ地ヲ見立テ宏
 大ナル圍場ヲ造管レ運漕シ来ルモノヲ此ニ貯藏シ

開拓使

才キ賣却ニ供ス（玉節ノ石炭園場ハ景切要ナル既
著手ノ事ニシテハ之ニ記セス）

第四賣却法

一石炭ノ商法ニ付一大切要ナルハ其貯藏ノ分量常ニ充備シテ毎ニ不時ノ需ニ應ジモ停滯スルコト無キコトナリ。若シ時ニ欠乏スルトキハ入津スル舟船安シジテ之ニ倚頼セズ他處ヨリ石炭ヲ備へ来リ遂ニ賣却ノ道ヲ塞クニ至ルベシ北海道ニテ此準備ヲ充テ為スハ亦一難事ト謂フベシ是レ冬季ノ間ハ風涛危険ニシテ舟船ノ往來ニ便ナラサルニ由ルナリ。因テ春末ヨリ秋末ノ間ニ間斷ナク運送ヲ勉メ冬日ノ欠乏ニ備フルコト必要ナリ。

一玉節ノ石炭商法是迄ハ同所支應ノ官負ニテ取扱ヒタレトモ此法ニテハ商法ノ立ツルキ見込甚覺東ナ

レ因テ考フルニ此商法ハ全ク物産課ニ委任シ東京或ハ大阪又ハ箱館ニ於テ惣ナル身代ノ町人一軒ヲ撰ビ之ニ任シテ賣却ノ事ヲ司ラシメ預メ石炭ノ價ヲ定メ才キ賣却ノ高ニ應ジ其百分ノ七或ハ十位ノ手数料ヲ給與スベシ

但レ石炭ノ價モ時々高下アルヲ以テ之ヲ定メガツシ故ニ其手数料モ時々増減アルベシ。然ルトキハ必死ニ勉強シテ賣却方ヲ行ヒ手数料ヲ増シコト欲スベシ而シテ之ガ為メ石炭ノ賣高増ストキハ隨テ開拓使ノ利潤トナルコト勿論ナリ。但レ之ヲ行フニハ景初ノ間ハ物産課中ノ官負彼地ニ在テ其法ヲ定メ實直ノ者一人ヲ撰ビ等外位ニ才キ石炭園場ノ番人ニ命ジ其ヲ預ケ門扉ノ開闔ヲ司ラシメ町

ヨリ石炭賣捌ノ事申出ツルトキハ之ヲ聞キテ其積
 出シ高ノ點檢セシメ且其價ヲ記録セシムベシ
 一此等ノ法ニ由ラズ唯官負ノ手ニ托シオキテ賣却ノ
 事ニ奮勵セシメザレハ商法モ死物トナリテ盛大ノ
 業ヲ開クコト能ハス是レ景心ヲ用フベキ要件ナリ
 ホロナイ石炭山開採創業惣入費高九積

一 金四十萬圓

鐵道製作

一 金四十萬圓

對雁村造石炭
同場船積場共

一 金四萬圓

川薰汽船二隻

一 金二千四百圓

同小舟拾六艘

一 金五千圓

石狩村石炭同場

一 金二萬五千圓

川口交舟

一 金五萬圓

薰汽運送船

一 金二萬圓

風

惣合五拾九萬六千四百圓

外ニ石炭山開坑入費并ニ鐵

薰気車停止場等造營ハ一萬五千圓余

ルトキハ惣入費ノ高六十萬圓餘也

右資本金ノ高ハ大ナリト雖大工業ヲ開キ石炭ノ賣

捌方十介ナルトキハ一年ニ廿水金壹割ノ利子即九六

ヲ得而メ數年ノ後ハ逐次ニ水金ヲ年賦スベキ利益

アルベシ

若シ右ノ高ヨリモ資本金ヲ減却シ卒尔ニ開坑ヲ始

ムレハ必損失ヲ免レ難シ是レ石炭坑ノ如キハ實ニ

大事業ニシテ眼前ノ小利ヲ顧ミズ永世ノ鴻益ヲ謀

ルモノナレハナリ故ニ例ハ百萬圓ノ資本金ヲ費

此ノ外ニ石炭山開坑入費并ニ鐵
 薰気車停止場等造營ハ一萬五千圓余
 ルトキハ惣入費ノ高六十萬圓餘也

開
石
炭

ヲリ石炭賣掘ノ事申出ツルトキハ之ノ間キテ其積
 出し高ノ點檢セシメ且其項ヲ記録セシムベシ
 一此等ノ法ニ由ラズ唯官負ノ手ニ托シオキテ賣却ノ
 事ニ奮勵セシメザレハ商法ニ死物トナリテ盛大ノ
 業ヲ開クコト能ハス是レ景心ヲ用フベキ要件ナリ
 一金四十圓
 鐵道製作
 一金四十圓
對雁村造石炭
同場船積場共
 一金四萬圓
 川蒸汽船二隻
 一金二千四百圓
 同小舟拾六艘
 一金五千圓
 石狩村石炭同場
 一金二萬五千圓
 川口交舟
 一金五萬圓
 蒸汽運送船

一 金二萬圓
 颯帆船二隻
 惣合五拾九萬六千四百圓
 外ニ石炭山開坑入費并ニ鍛冶場其外家屋石炭積場
 蒸氣車停止場等造營ハ一萬五千圓余ニ至ルベシ然
 ルトキハ惣入費ノ高六十萬圓餘也
 右資本金ノ高ハ大ナリト雖大工業ヲ開キ石炭ノ賣
 捌方ナキナルトキハ一年ニ付本金壹割ノ利子即凡六
 ヲ得而メ數年ノ後ハ逐次ニ本金ヲ年賦スベキ利益
 アルベシ
 若シ右ノ高ヨリモ資本金ヲ減却シ率爾ニ開坑ヲ始
 ムレハ必損失ヲ免レ難シ是レ石炭坑ノ如キハ實ニ
 大事業ニシテ眼前ノ小利ヲ顧ミズ永世ノ鴻益ヲ謀
 ルモノナレハナリ故ニ例ハ百萬圓ノ資本金ヲ費

蒸汽船
 採掘
 六拾
 概

石炭賣捌ノ事申出ツルトキハ之ヲ聞キテ其積
出シ高ク點檢セシメ且其積ヲ記録セシムベシ
此等ノ法ニ由ラズ唯官負ノ手ニ托シオキテ賣却ノ
事ニ奮勵セシメザレハ商法モ死物トナリテ盛大ノ
業ヲ開クコト能ハヌ是レ景心ヲ用フベキ要件ナリ
ホロナイ石炭山開採創業惣入費高九積

鐵道製作

對雁村邊石炭
同場船積場共

- 一金四拾五萬圓
- 一金四萬圓
- 一金二千四百圓
- 同小舟拾六艘
- 川蒸汽船二隻
- 石狩村石炭同場
- 川口渡舟
- 蒸汽運送船
- 一金五萬圓
- 一金二萬五千圓
- 一金五萬圓

一金二萬圓

颯帆船二隻

惣合五拾九萬六千四百圓

石炭山開坑入費并ニ鍛冶場其外家屋石炭積場
蒸氣車停止場等造營ハ一萬五千圓余ニ至ルベシ然
トキハ惣入費ノ高六十萬圓餘也

石炭本金ノ高ハ大ナリト雖大工業ヲ開キ石炭ノ賣
捌方十分ナルトキハ一年ニ廿本金壹割ノ利子^{即九六}
得而メ數年ノ後ハ逐次ニ本金ヲ年賦スベキ利益
ルベシ

石ノ高ヨリモ資本金ヲ減却シ率爾ニ開坑ヲ始
レハ必損失ヲ免レ難シ是レ石炭坑ノ如キハ實ニ
大事業ニシテ眼前ノ小利ヲ顧ミズ永世ノ鴻益ヲ謀
モノナレハナリ故ニ例ハ百萬圓ノ資本金ヲ費

汽船廉價ニ見込有之ノハナラズ
採器機代等ヲ如シハモノトシテ
六拾万円ノ貳割ヲ増シ七拾貳
概計ニテ可ナラニ歟

一 一年ニ拾萬圓ノ利アルモ拾萬圓ノ益ヲ見ルコト能ハス是レ獨リ石炭坑ノミナラズ百般ノ大事業ヲ起スハ皆然リ

岩内石炭

一 岩内ノ石炭中ニハ盤石多ク其品位モ亦ホコトイノ石炭ニ劣ルコト既ニ「モンルー氏」ノ分析ニテ分明ナリ然レ氏近來其坵方ヲ改革シ坵出シテ後之ヲ精撰シテ盤石ヲ去リ且莖包ニシテ運送シ其破碎スルヲ防クガユヘ大ニ声價ヲ増セリ瓦斯ヲ製シ又「コークト」為シテ鑛類ヲ溶解スルニハ十分ノ良品ニメ遙カニ盤城石炭ノ右ニ出ツ然レ氏之ヲ蒸気船又ハ蒸気車ニ用フルトキハ唐津産ノ者ニ及バス且時アツテ爐ノ拾子ニ粘レ之ヲ溶解スルノ患無キ能ハズ通例唐

津其外ノ石炭ヲ文セデ焚クヲ良ク聞ケリ

一 岩内石炭山ノ一大患ハ其近傍良港ニ乏シクメ運送ニ不便ナルニ在リ「ライマン」氏ハ茶津内港天然ノ地勢ニ由リ岩石ヲ積ニデ堤防ヲ築キ船ヲ停泊處ヲ造ル見込アレ氏其費大ナルカユヘ方今ノ世態ニテハ石炭ノ利益ヲ以テ之ヲ償フコト頗ル難シ

一 茶津内奥ノ石炭ヲ開キ之ヲ茶津内港ニ出ストキハ港内今ノ形ニテモ西洋小形ノ每一隻ヲ容ルハニ足ルガユヘ少ク便宜ヲ得ベシ然レ氏新坑ヲ開キ二十余丁ノ新道ヲ作ル費亦少カラズ
一 然ラハ如何シテ可ナラム曰ク「ホロトイ」石炭山ヲ開クマデハ其業ヲ發セス質美ナル部坑方今手ヲ著シ三分量ヲ開采リ西洋形運漕船二三艘ヲ回シ春ホヨリ

秋未ニ至ル間中拭リニテ積載セシラ函館小樽等ニ
 送致シ勉メテ運漕ヲ便ニシ安價ニテ之ヲ賣ルトキ
 ハ相懸ノ利益アルベシ而メタトヘホロナイ山間坑
 ノ後トイヘドモ之ヲ發ベキニアラズ臨々世上百工
 ノ間クルニ隨ヒ其用次第ニ増シ殊ニ近地ノ鑛類ヲ
 採ス等ノ事起ルトキハ十分ニ之ヲ間キ利ヲ占ムル
 ニ足ルベシ果シテ其時ニ至レハ若干ノ金ヲ費シ良
 港ヲ築クモ亦効ナカルベシ
 一石炭賣切ノ法ハ前ニ所論ト一ナリ

明治七年十二月

大島圭介識

